

1年間の保育記録の省察過程 (1)

——拒否的表現をするR児を捉えて——

○ 安見 克夫
板橋富士見幼稚園

秋田喜代美
立教大学

鳥井亜紀子・小林美樹
板橋富士見幼稚園

寺田清美
松ノ木保育園

問 題

親から離れるといった今まで経験したことのない環境と接する時、幼児は心の不安や喜びなどが色々な形で表現される。こうした心の思いや葛藤は幼児の営みに大きな影響を与える。幼児一人ひとりの営みが発達に即した適切な環境のもとで行われるためには、一人ひとりの幼児の発達や生得的気質及び遊びの志向などを事前に理解し幼児の営みの中で瞬間的な方向性を察知しながら適切に援助しなければならない。さらにそのありようを出来れば刻銘に保育日誌に記述し、評価反省していくことが求められる。しかし実際には、毎日の忙しい保育の中で保育日誌を読み返したり、1年間の振り返るといったことは時間的にも制約され難しいものがある。さらに部外研究者や他園の先生を招いてカンファレンスを行うとなると、資料整理にかなりの時間と労力を要する。そこで、我々は3歳児担任2名が書きつづった1年間の保育日誌の記録、評価、反省、計画及び、観察記録、第3者による筆録・VTRのプロトコルを園長が中心になって整理し、拒否的表現が多く見られたR児の1年間の成長過程について、保育日誌を手がかりに保育者の援助と1年間を通して成長した新たな育ちを改めて実感してもらうためにカンファレンスを行い省察して見ることにした。

資料と研究方法

R児に関する行動の解る場面の資料数179場面記録(1995.4.10から1996.3.20まで)

3歳児複数担任2名(4年目と2年目)の日々保育記録(日誌)と研究用に収録したVTR及び筆録、及び私的メモと場面での記憶からR児の拒否表現の消失過程をカンファレンスにおいて省察する。

参加者はR児の担任2名と立場の異なる保母・研究者及び園長の5人によって行われた。

省察資料

- ①保育日誌 ②VTRされた場面と日数及び記録
場面3回(カット20ヶ所) 日数3日・時間6時間
- ③ 筆録された日数と場面数(4月から11月)34場面
- ④ 保護者との連絡帳の件数9件
- ⑤ 私的メモ及び記憶レポート47件

R男のプロフィール

社宅に住んでいて父はサラリーマン家庭である。母は穏やかな人柄であるが多少神経質な面も感じられる。R男は体格がよく利発な印象がある。下に妹が1人いる4人家族である。(年齢3歳)

研究内容

カンファレンス資料を事前に配布し、1年間のRの成長の節目や保育者の援助で気になった箇所を出し合いほぼ一致した箇所である。

1学期1995.4.10 ①不安を見せる拒否的表現

式の終了後、お皿に盛ったごちそうを廊下に出して行ったのでTが「R男くん、何につくったの」と語りかけるとR男は「おいしいものをつくったんだよ」と返答し「おいしそうね、先生にもごちそうしてくれる?」と尋ねると「ダメ」「おとうさんにごちそうするんだ」といって拒絶し保育者に触らせなかった

② 1995.4.12-15安定に向けてTが積極的に関わる

入園初日、R男は、下駄箱前で入室を拒み、母親への後追いはないが入室出来ない。その後、数日同じ現象が続く砂場で一人遊びをする。その後徐々に入室するようになったが室内では粘土遊びが好きなようでお団子やドーナツを作っては「ぼくがつくったの、おいしそうだろう」とTや周囲の子どもたちにみせるが「ママが食べるからダメ」といって決して触らせなかった

③ 1995.4.24他児や保育者に心を寄せ始める

園庭で大型鯉のぼりの製作をする。型紙に手型のペインティングを顔に見立て 鯉作りが始まった。砂場にいたR男が関心を示し覗きにきた。Tが「スタンプ、R男くんもやってみる?」と誘うと「よこれると、おかあさんがいけないというからやらない」と言って砂場へ戻ってしまう。Tが完成した鯉を持って走る際にクラスの子どもたちが追いかけくる。その姿を促してR男は砂場からしばらくじと見ていたが、砂場の道具を持ったまま、園庭の真ん中に近寄り走り回っている他児の中に紛れ走る姿が見られた

④ 1995.5.1 保育者が強く関わる

小雨が降ってきた。砂場にいたR男は、無理矢理教室に戻され教室前で大声を出して泣く。TはR男を抱き上げ背中をさするが「ママー」と泣きじゃくる。Tが「大丈夫よ」と語り掛けると、Tに顔を埋めて徐々に泣き止み、鼻をいじり始めた

⑤ 1995.5.1 再び拒否が

外へ飛び出そうとするので、廊下で止められると「いやだー」と叫ぶ。またそのとき園長が近寄ると「あっち行ってー」と遠ざける。

⑥ 1995.5.8-9 自分の快感情を伝えてくる

連休明けの戻り現象を小さくするために、連休明けの初日は午後2時からお母さんと一緒にお楽しみ会が開かれた。その席で「楽しかった、楽しかった」とTに連発していた。翌日登園するやいなや、Tに「今日は、ママがお弁当作ってくれたんだ」と言ってきた。

⑦ 1995.5.17 他児やTと共感しながら遊びが発展する

砂場で初めて他児3名とチョコレート作りが始まり、保育者は水洗い用のバットを出してあげると「固いチョコレートを作ろう」と足で踏み固める。Tが「食べ物を踏んだら食べられなくなっちゃうよ」というとR男は「ハイ食べて」と突き出し味見をさせられる。チョコレート作りも自分が中心に展開されていないと遊ばなかったがこの日から遊びが盛り上がり、他児とも関係を深めていき始めたので、保育者は気になる要素が減少した

⑧ 1995.6.23 新たな展開が始まる

前日からレゴブロックでピストル作りがはやり「パンパン」と撃ち合いが始まっていた。しかし、スクリプト化していないので「パンパン」と撃ちあったり、Tに「見て見て」と出来映えを見せに来たりしながら、ごっこへの始まりのような様子が見られた。そこでTは、基地を想像してダンボールを用意してあげるが、他児のごっこ遊びの小屋となり基地にはならなかった。このことは劇的な物語る方向へ発展していなかったためと考えられる。

⑨ 1995.7.5 共有できないR男

オーレンジャーのお面作りが始まった。R男も作ったが彼のお面はアンパンマンであった。そのお面を被って、みんなと一緒にジャングルジムへ登った。製作したお面の違いからオーレンジャーのポーズに共感出来ず砂場へ一人でいってしまった。生活の中で経験のないオーレンジャーごっこは成長の痛手となってしまった。

学期の考察

R男は入園当初、物事の取り組みに不安を覚え、他児やTとの関係を極力避けようとするあまりに興味や関心との狭間から拒否的心の揺れ動きがあった。Tは安定させようとR男の興味に積極的に関わる姿が日誌から読みとることができた。

2学期 ⑩1995.9.6 スクリプト化した遊びに安定感が

オーレンジャーの基地ごっこが発展し役割なども決まり、ジャングルジムからパトロールへ出かけていく。行動範囲は一カ所に止まっていた1学期より広範囲になり、セーラームーンをやっつけるといった共通の目的が現れ遊びも無理なく展開してきている。そのためTの援助が過剰のき、Tは口調の刺がとれたR男に対して見守れると感じはじめた。

⑪1995.9.14 一人になってしまったのか？

ジャングルジムにいたR男は、4歳児からボールをぶつけられ、基地がとられそうになるが、一人陪警戒心の強いR男は、一所懸命に場所を守ろうとする。R男の姿にTはたくましさを感じた。ある時「また孤立か、と感じ」後で自分一人で基地を守っていたことに気づかされる場面があった。

⑫1995.9.18 自分の気持ちが悪えるR男

Tが「お面、家で作ってもらったら」というと、R男は「だって、うちでお面作ってくれないの。ママ手伝ってくれないの。電話でね。忙しくてね。だって、ほんとうに忙しいんだ。あのね。アイスとか買ってもらえないし。パパは何でも買ってもらえるの」と、言う

⑬1995.10.9 自我意識が出てきたR男

運動会のお面作りで、7匹の子やぎのお面で、R男は、やぎを作った「かけない、ぼくの、へんなのおばけやぎだ」T「かっこいいね」というと「ぎざぎざなの、こわそうだ」という。以下続く

⑭1995.11.24 自我意識が強くなった来る

焼き芋会で絵を描いた時、R男は、研修生に「おいもかいているところ」と言って、先生描いてとせがむ、自分で描いたお芋の絵がうまくできなかったのか、後ろ手に隠し、見せにくる。が「やっぱり間違えた」といって立ち戻り、折角描いた絵の上からぐちゃぐちゃにしてしまった。以下続く

学期の考察

資料を総合すると内面は神経質で臆病な所があり、他児との関係も強く押し切られると逃避する傾向が見られる。1学期後半から2学期前半では行きつ戻りつ関係が多いように読みとれる。しかし、徐々に自我意識も強くなり他児との関係を強く意識するようになっていった。

3学期 ⑮1996.1.16.17.18-22他児と物語る

この日から再び、砂場でのチョコレート作りが始まったが、今回は子供同士の中に共通の物語るものがあり、Tに女が食べると死ぬというチョコレートと遊びが展開していく。以下続く

⑯1996.3.14 物語る遊びへ

このころになると、男児・女児が混ざり砂場で「どくチョコレート作りが始まった。B子に「先生こっちに来てごらん」と誘われる。R男が「ね、せんせい、せんせい、食べて」T「だって、しむんでしょ死ぬんでしょ」」「どくじゃないから」・・・続く

学期の考察

自我意識の強さから遊びも、主導的で母チョコレート作りも、他児に水を運ばせたり、道具を持ってこさせたりする行動が目立ち、時に相手から注意される場面もあった。Tに対しては強い信頼感が芽生え、快く、死なない母チョコレートをTに食べさせてくれたりといった安定した関係が保てるようになったと考えられる。

省 察

保育者は、入園当初のR男の行動に対して他児と同様に安定させてあげたいという願いからR男の興味を探り試みる様子が日誌の前後で細かく記載されていた。

砂場は集団から逃避しようとする最も安全な場所である。しかし日誌の中4.24③にその後の言動として「汚れると、おかあさんがいけないというから」という言葉があり汚れを恐れるR男にとっては随分我慢していた場所と考えられる。（本心は、泥あそびがした

いのかもしれない）拒否をする事によって慌たしい4月の時期は行動の細かい所まで観察出来ない結果を招きTとのズレを生じさせてしまうことが解った。

ましてR男のように拒否を唯一な守りの武器とする子どもは、自己の取り組む遊びが自発的で主体であるかのように考えられがちである。また、拒否的表現がその後の消失されていった中でも、新たな環境に入ろうとする時必ずと言って良いほど拒否をしたり出遅れる事が解った。また、日々保育の中で「今日の今」を瞬時に読みとり理解し再構成していく事と後にこうしたカンファレンスを通して成長を振り返ることで、その時の援助してきた行為に対する思いや方法が意味を持ってハッキリと示されてくる。保育日誌の記述からそのときの保育者の率直な思いや願いが読みとることが出来る。実際の保育日誌は、毎日記入され、保育者のその日の最も印象深い出来事と関わりについて記述されていることが多く毎日R男について記述されているとは限らない。また、記述方法にも現象だけを捉えていたり刻銘に自分の気持ちや相手の気持ちを読みとって記述されていたり、互いのズレを反省として記述されていたりする事も多かった。しかし、このような資料整理や周囲の関係者の協力によって保育者自身、R男の育ちを1年というスパンの中で成長を再び振り返る事が出来たと思う。また、成長の節目に出合うときの援助のあり方の適切さについて率直な反省材料となった。以上の事からR男の拒否的表現は、年間の流れの中でいくつかの園行事や遊びへの保育者の援助によって心開かれていく様子や仲間関係が深まりR男の遊びの中で物語って行く様子が省察することが出来き担任2名は新たな喜びを感じたと述べていた。

今後に向けて、保育日誌は、日々忙しい保育の中で、行事などの準備に追われた時など後日記入する事も良くなる。又時に記述されない日や一日の流れだけしか記述されない事もある。しかしこのような1年間の記録を管理者が担任と共に整理し、少ない資料を手がかりに意外な保育者の思いをくみ取ってあげたり、保育方法への提案を提起するきっかけとなる事と思う。今回のカンファレンスは、R男に返す事は出来ないが、次年度の保育者の資質向上への知識となって行くものと信じてる。これからも記述方法の充実を図り、保育日誌からより一層幼児の成長を物語として読みとれる日誌指導を行って行きたい。